

研究開発評価に関する現状及び問題点 (大学、研究機関内における評価)

平成17年2月15日
文部科学省 科学技術・学術政策局
評価推進室

大学、研究機関内における研究開発評価の概況について

評価の実施状況

大学、公的研究機関内の研究開発評価の対象

「研究者」を対象とした評価が約6割、「組織」を対象とした評価が約4割、「研究開発課題」と対象とした評価が約4割

大学、公的研究機関内の研究開発評価の実施時期

「毎年定期的に実施」が約5割、「研究の進行にあわせて」が約2割

大学、公的研究機関内の研究開発評価の形式

「自己評価」が約6割、「内部評価」が約5割、「外部評価」が約4割

大学、公的研究機関内の研究開発評価の目的

「研究開発活動の活性化」が約6割、「組織の活動状況の点検」が約5割、「研究などの資源配分方針の参考」が約4割

大学、公的研究機関内の研究開発評価の項目

「研究成果」が約8割、「社会貢献」が約5割、「教育又は人材育成」が約5割

評価によって改善された点

評価に際して、研究者の研究意欲を向上させるために講じた策

- ・学内、機関内の競争的資金の資源配分に反映(51件)
- ・評価結果等の情報の公開(41件)

評価によって研究活動が改善された具体的事例

- ・外部資金等への応募意欲の向上(56件)
- ・獲得した外部資金額、共同研究数が増加した(33件)
- ・研究の方向性が明確となり、研究の質が向上した(20件)

評価事務局の現状

大学、研究機関内における評価事務局の構成

- ・「総務課、企画課等において、評価も所掌している」が約2割
- ・「評価の名を冠した恒常的な部局が存在するが、他部局との併任の人間だけである」が約0.5割
- ・「無回答」が約5割

大学、研究機関内における評価事務局の担当者数

- ・「1人」が9.4%、「2人」が7.9%、「3人」が6.5%と小規模なケースが多い
- ・「無回答」が約6割

大学、研究機関内における評価事務局中の研究経験者

- ・「0人」が18.1%、「1人」が3.6%と少ない
- ・「無回答」が約7割

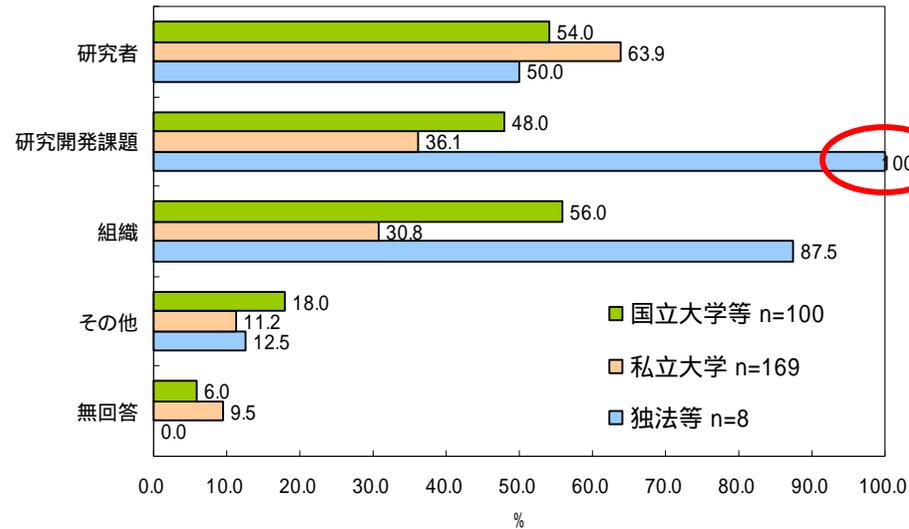
大学、研究機関内における評価事務局中の評価手法に通暁した担当者

- ・「0人」が21.7%、「1人」が2.5%と少ない
- ・「無回答」が約7割

大学等の機関内における研究開発評価

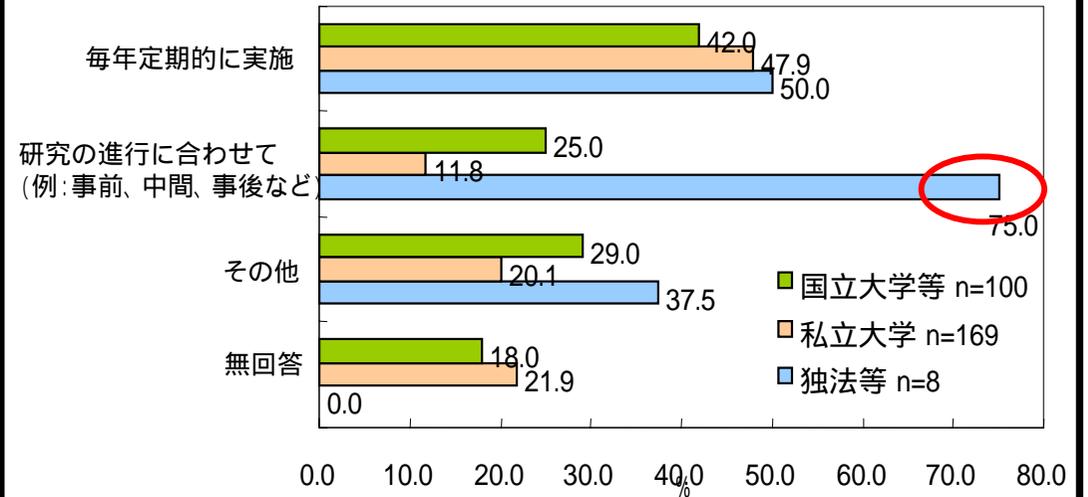
研究評価の対象

- ・「研究者」を対象とした評価が約6割
- ・「組織」を対象とした評価が約4割
- ・「研究開発課題」を対象とした評価が約4割



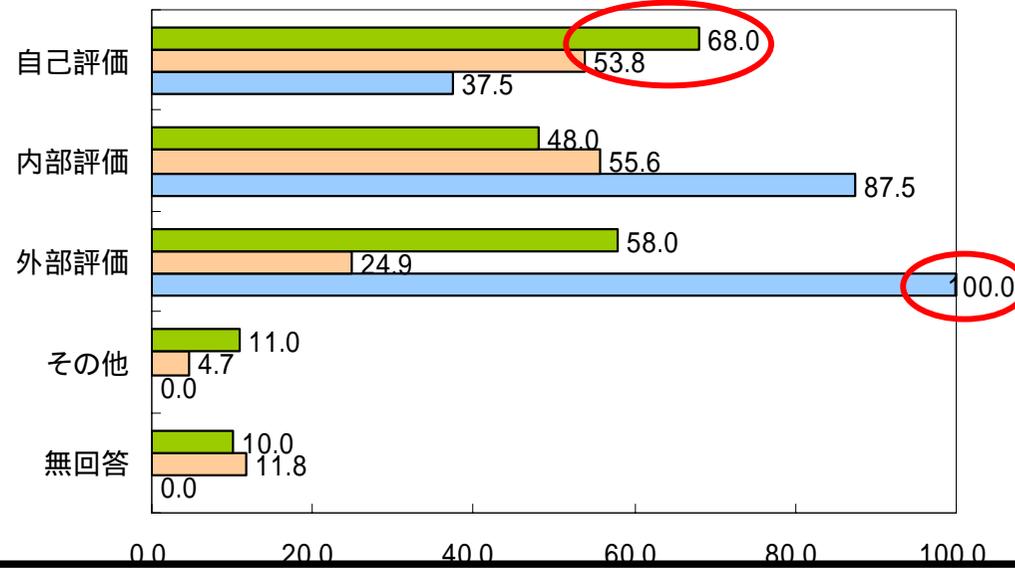
実施時期

- ・「毎年定期的実施」が約5割
- ・「研究の進行にあわせて」が約2割



研究評価の形式

- ・「自己評価」が約6割
- ・「内部評価」が約5割
- ・「外部評価」が約4割

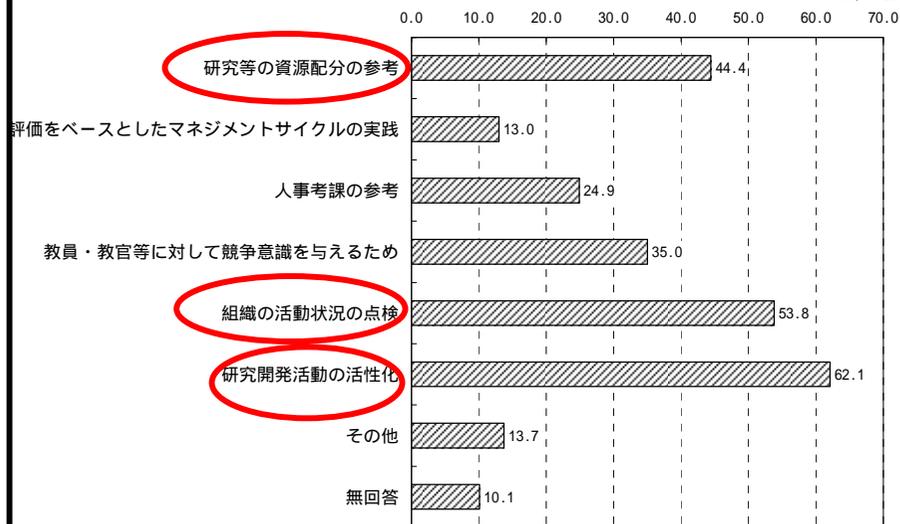


大学等の機関内における研究開発評価

評価の目的

- 「研究開発活動の活性化」
- 「組織の活動状況の点検」
- 「研究などの資源配分の参考」が多い
- 「マネジメントサイクルの実践」が少ない

MA, N=277



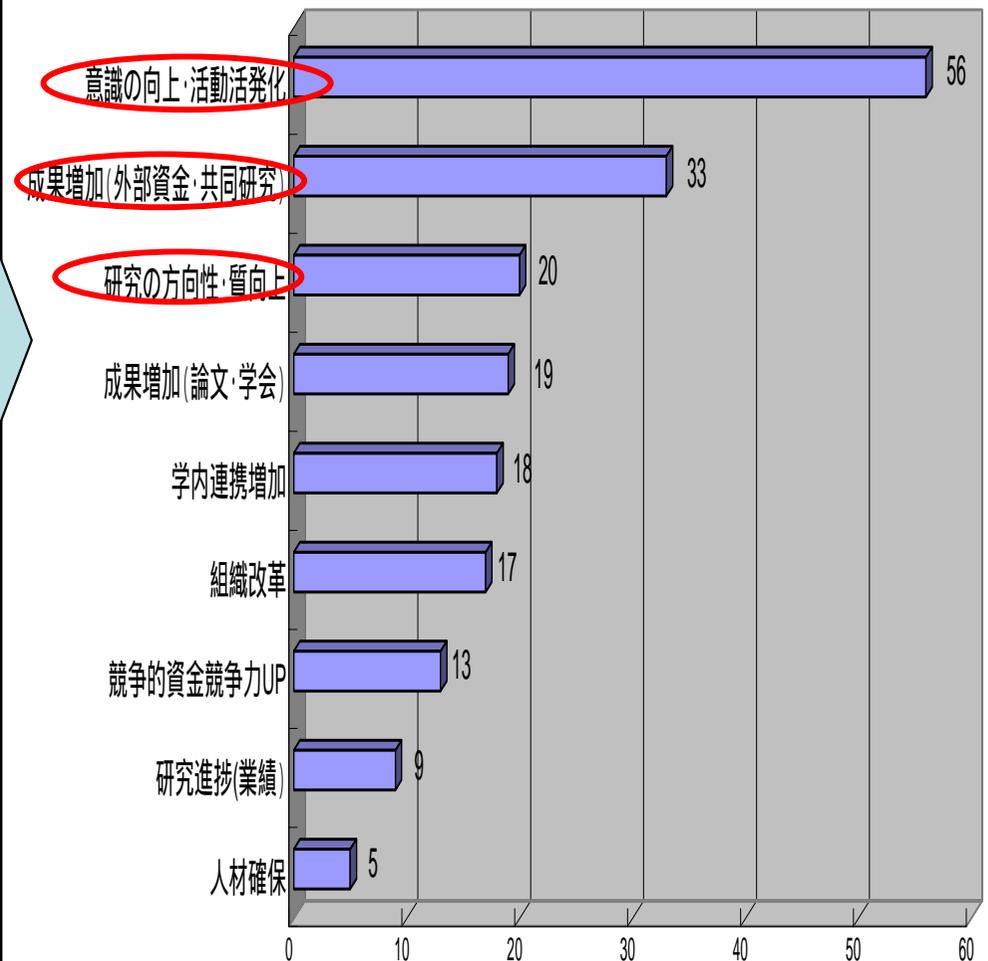
研究者の研究意欲を向上されるために講じた方策

- 「学内・機関内競争的資金の設置」
(51件)
- 「評価結果等の情報を公開することにより
研究者の同士の競争を促進」
(31件)
- 「処遇に反映(昇格、特別給)」
(27件)

等を実施。

評価によって改善された具体例

- 「意識の向上・活動の活発化」
 - 「成果の増加(外部資金・共同研究)」
 - 「研究の方向性・質の向上」
- が多く挙げられた



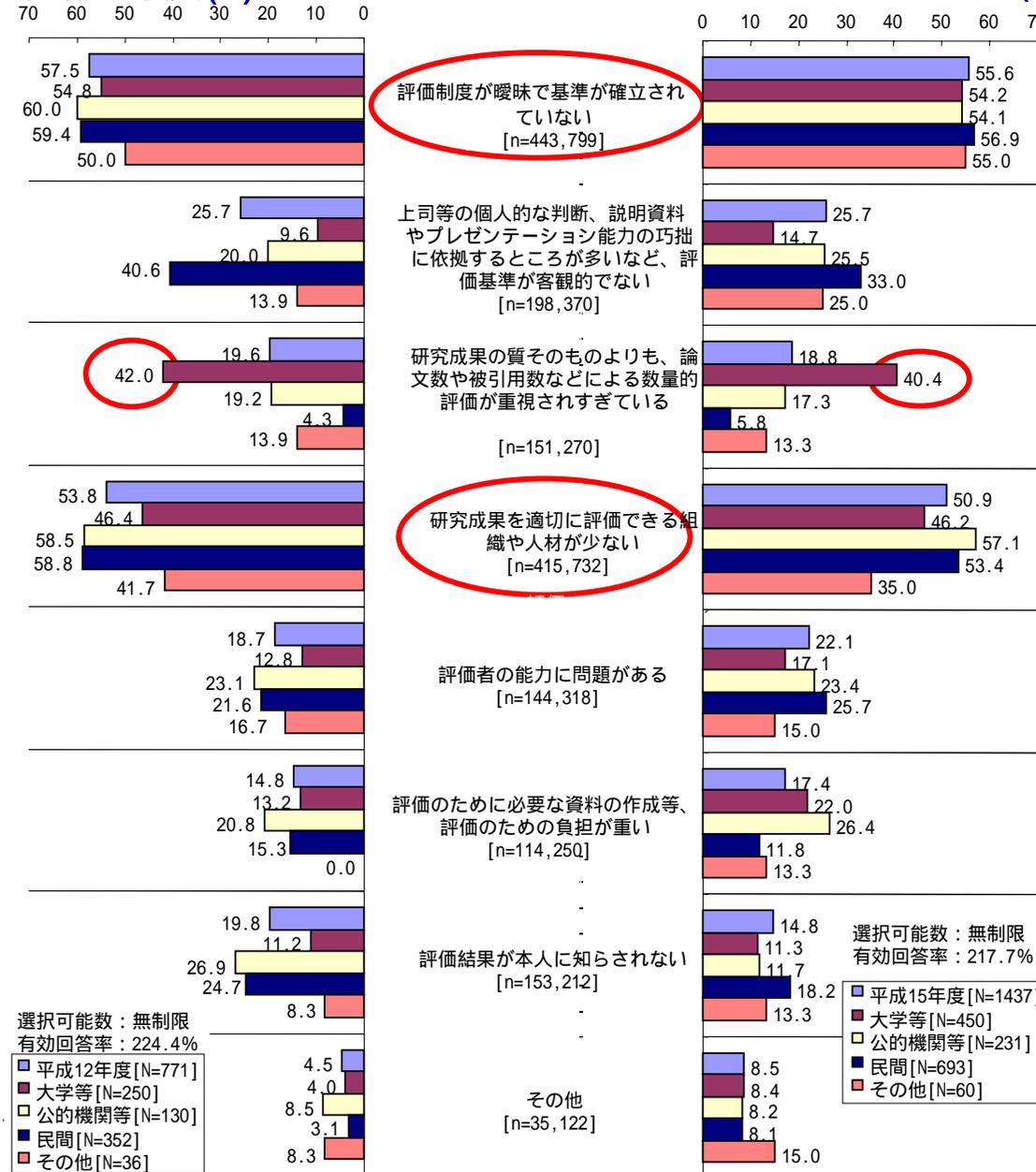
評価制度の問題点

「評価基準が確立されていない」「客観的に評価できる組織・人材が少ない」等の指摘多い
 大学内においては、論文等数量的評価が重視されすぎているとの指摘が多いのが特徴的

所属機関内における評価制度の問題点（経年変化・所属機関別）

平成12年度(%)

平成15年度 (%)

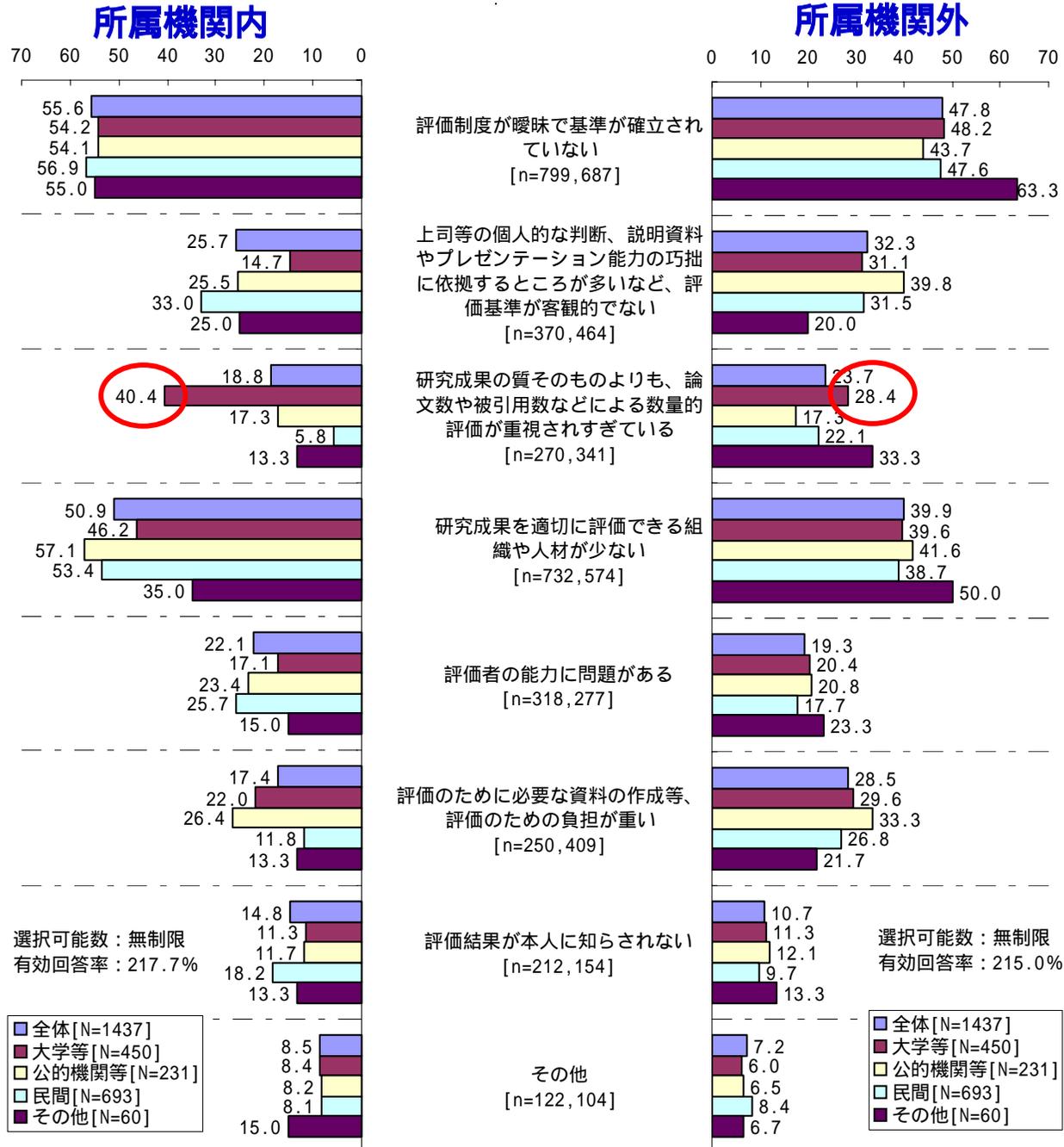


(出典)
 我が国の研究活動の実態に関する調査報告(平成15年度)

評価制度の問題点

大学内においては、論文等数量的評価が重視されすぎているとの指摘が多いのが特徴的

所属機関の内外における評価制度の問題点（所属機関別）

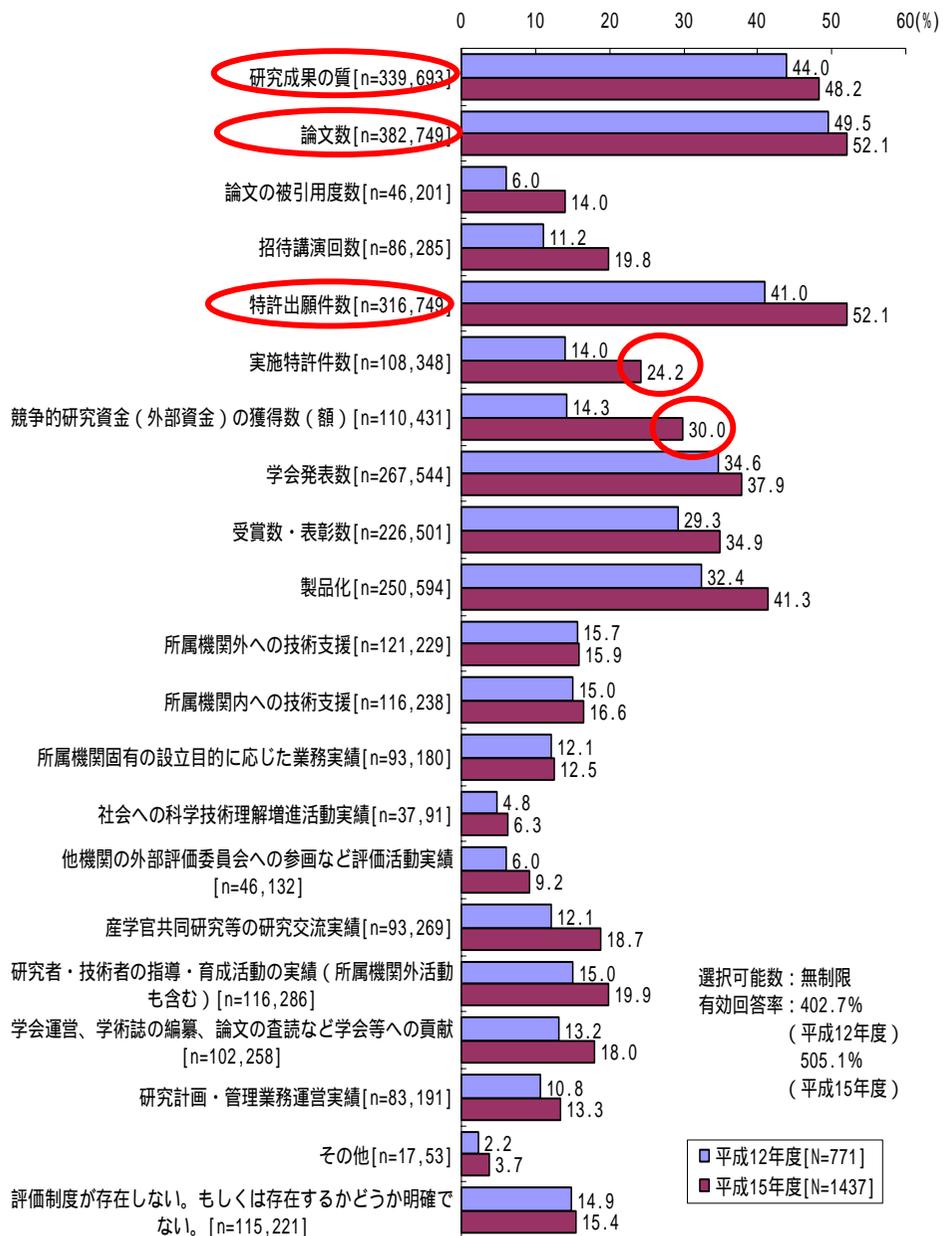


(出典)
我が国の研究活動の実態に関する調査報告(平成15年度)

機関内における研究者評価

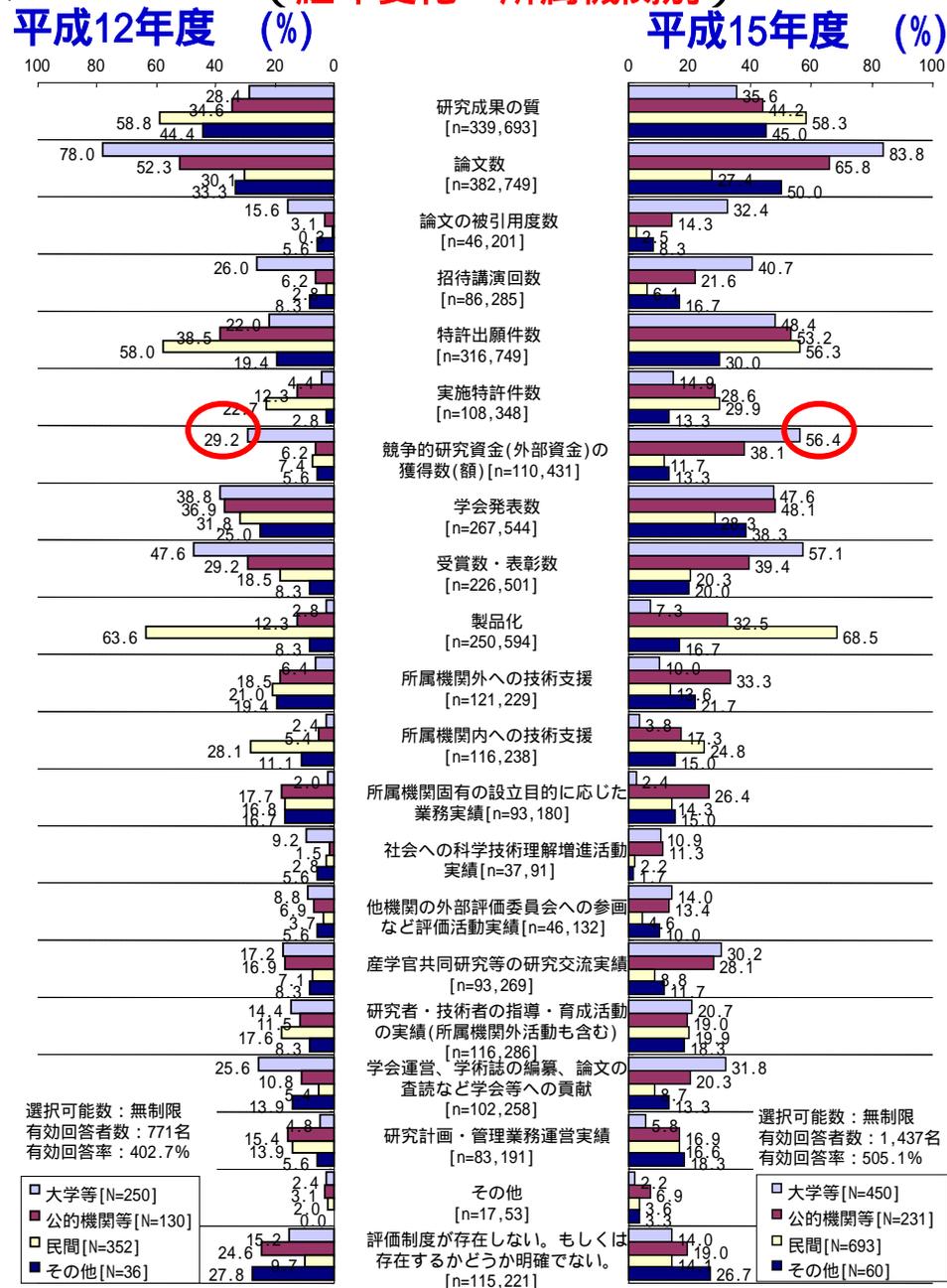
指標としては、「論文数」「特許出願件数」「研究成果の質」が多い

研究者評価として用いられる指標（経年変化）



研究者評価として用いられる指標

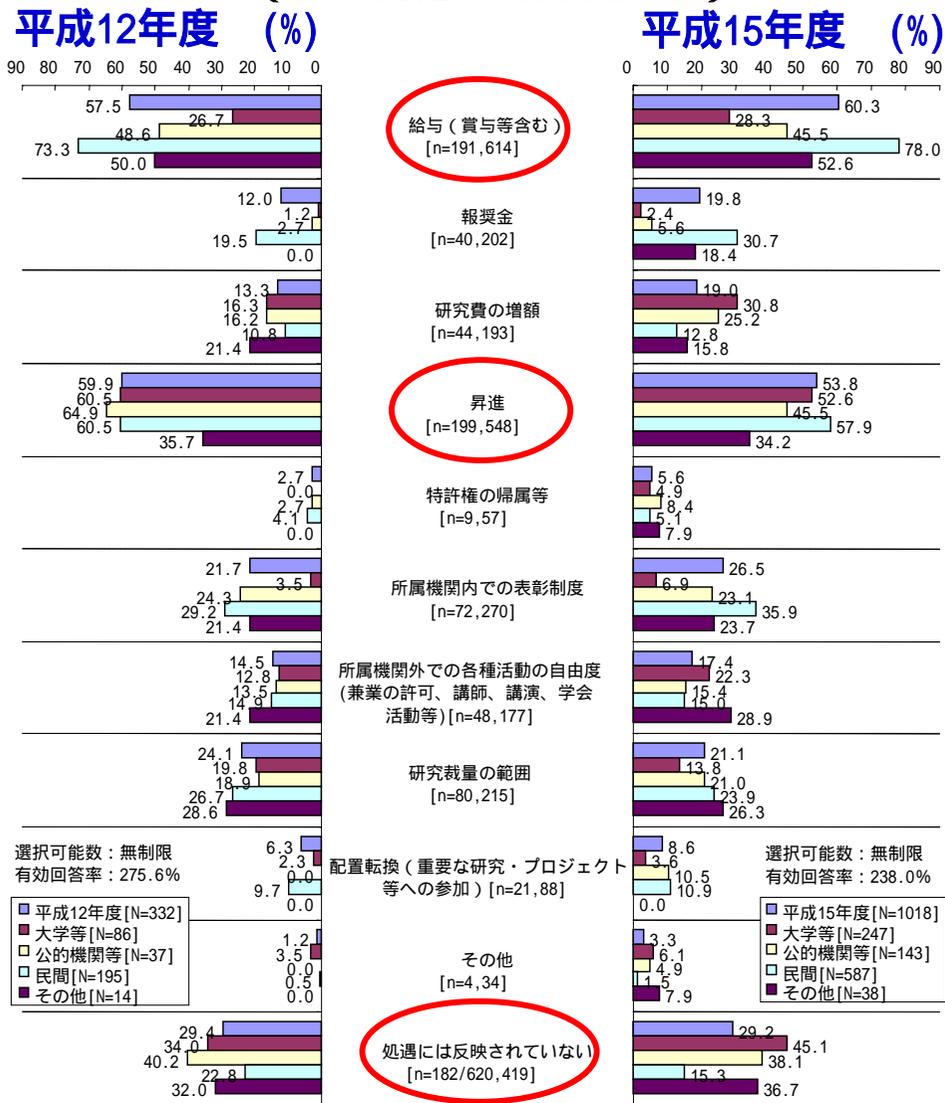
(経年変化・所属機関別)



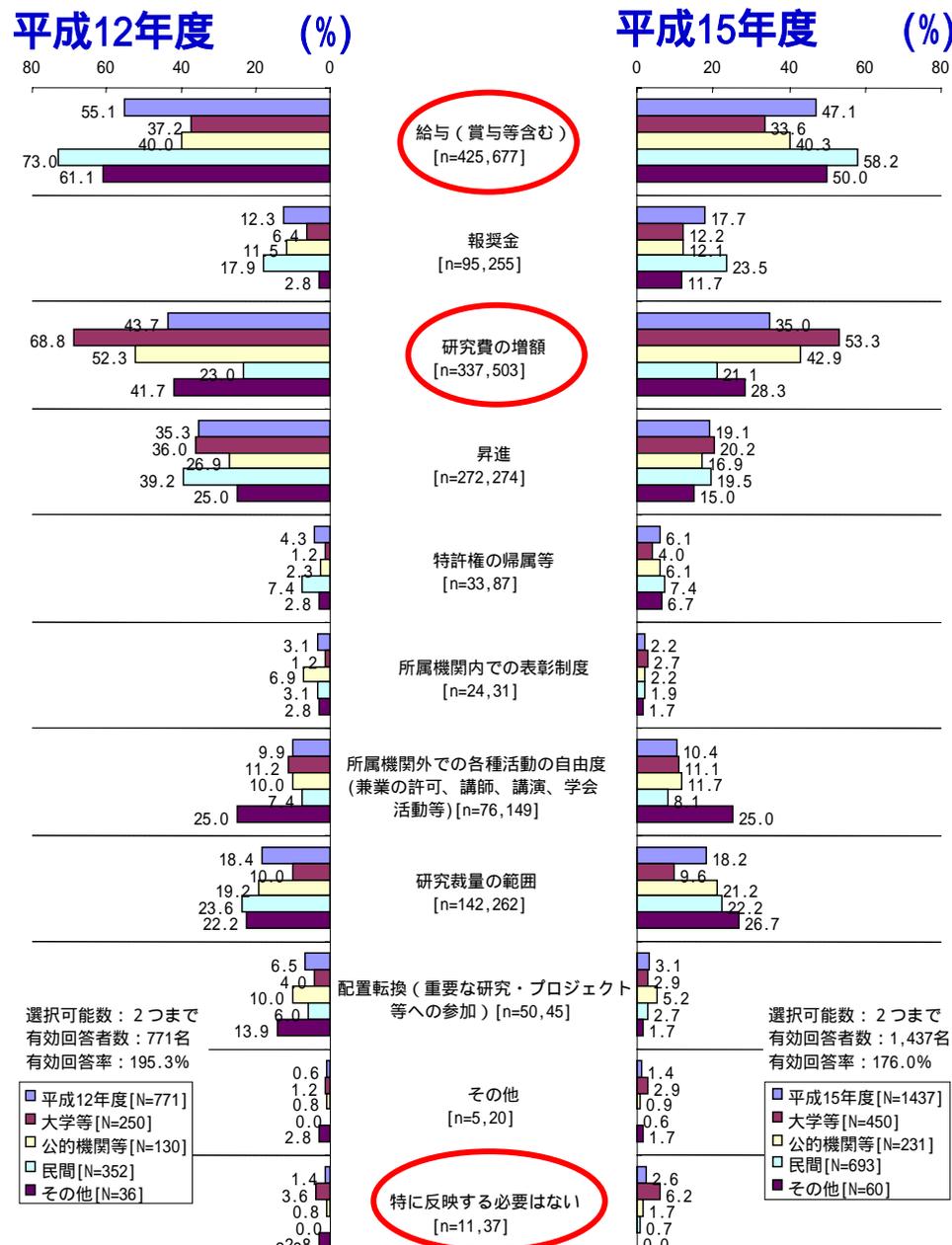
機関内における研究者評価

「給与」「昇進」「処遇には反映されていない」が回答が多い
 評価を反映すべき処遇については、「給与」「研究費の増額」が多い

評価が反映されている具体的処遇 (経年変化・所属機関別)



評価を反映すべき処遇 (経年変化・所属機関別)

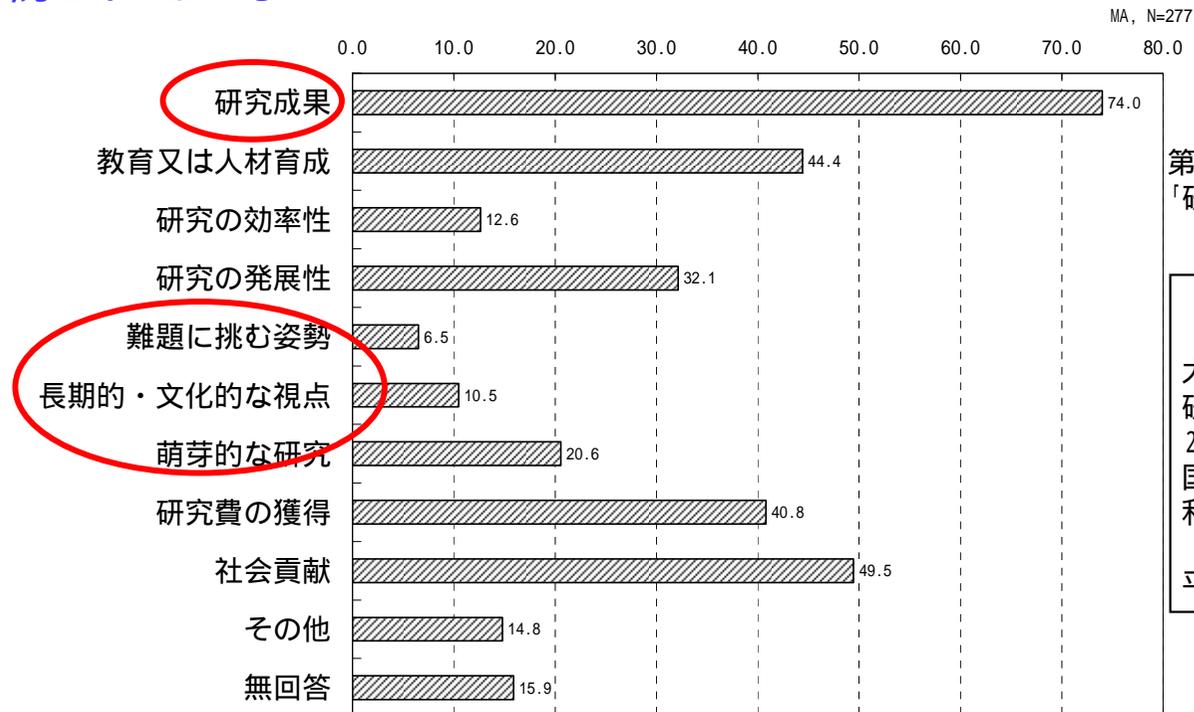


注) 平成12年度の調査結果については、予備質問として調査しており、「処遇には反映されていない」という回答については、前段階の質問にて調査した結果である。具体的には、「あなたに対する研究者としての評価は、処遇に反映されていますか」という問に対する、「反映されている」、「どちらかと言えば反映されている」、「どちらかと言えば反映されていない」、「反映されていない」、「わからない」という5選択肢のうち、の回答者数の合計を有効回答者数で除した割合である。そのため、平成15年度の調査結果については、「処遇には反映されていない」以外の選択肢の回答率は、全有効回答者数1,437名から「処遇には反映されていない」を選択した419名を引いた1,018名に対する回答率としている。

長期的、萌芽的な研究等における問題点

研究評価における評価項目

「研究成果」が重要視される一方、「長期的視点」「萌芽的な研究」「難題に挑む姿勢」があまり重要視されていない



第16回研究評価部会資料
「研究開発評価アンケート集計結果」()より

研究開発評価アンケート
調査対象
大学、研究機関(文部科学省所管)の
研究開発評価部門
277機関より回答を得た(回収率45.6%)
国立大学22%、公立大学9%、
私立大学61%、研究法人等8%
対象期間:
平成15年12月~平成16年2月

研究評価関係者等の代表的な意見

評価結果に対して敏感になった結果、長期的な研究、重要ではあるが、成果がでにくい研究を敬遠する傾向が見られる

ボトムアップ型の基礎研究(萌芽的研究、培養的基礎研究)や研究費の小額な個人研究は一律に対象とすべきではないと考えられる

評価項目、期間を含め、マネジメントサイクルは研究の種類によって変化するので、一様の評価ではなく、研究規模に応じたきめ細やかな評価をする必要がある

単年度の評価はむしろ研究意欲や効果を阻害する場合があります、中長期的な視点に立った評価方法の方策を考える必要がある

評価項目「社会貢献」における問題点

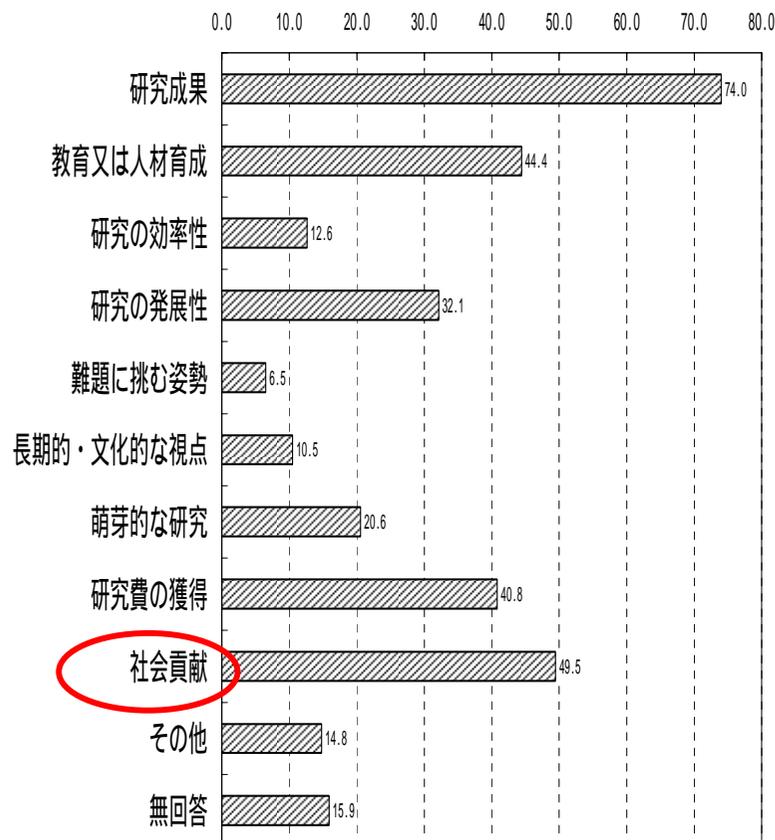
社会貢献に関する評価

近年研究開発における評価において「社会貢献」が重要視されつつある
 評価項目「社会貢献」において、産学官連携等経済的な価値への貢献については評価されているものの、安全、安心や文化等への貢献（ ）の指標がなく評価できない状況

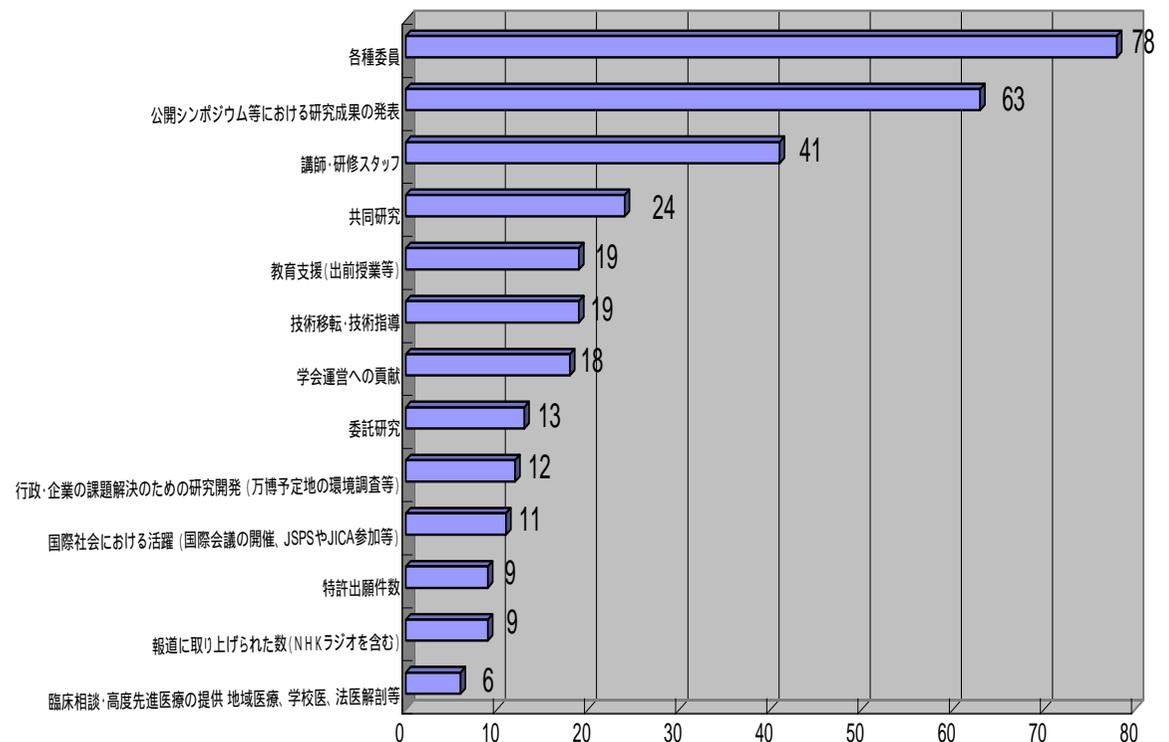
() 第2期基本計画の目指すべき国の姿「知の創造と活用により世界に貢献できる国」「国際競争力があり持続的発展ができる国」「安全・安心で質の高い生活のできる国」の「安全・安心で質の高い生活のできる国」に資する科学技術の貢献

現在実施されている評価における評価項目

MA, N=277



項目「社会貢献」の内容



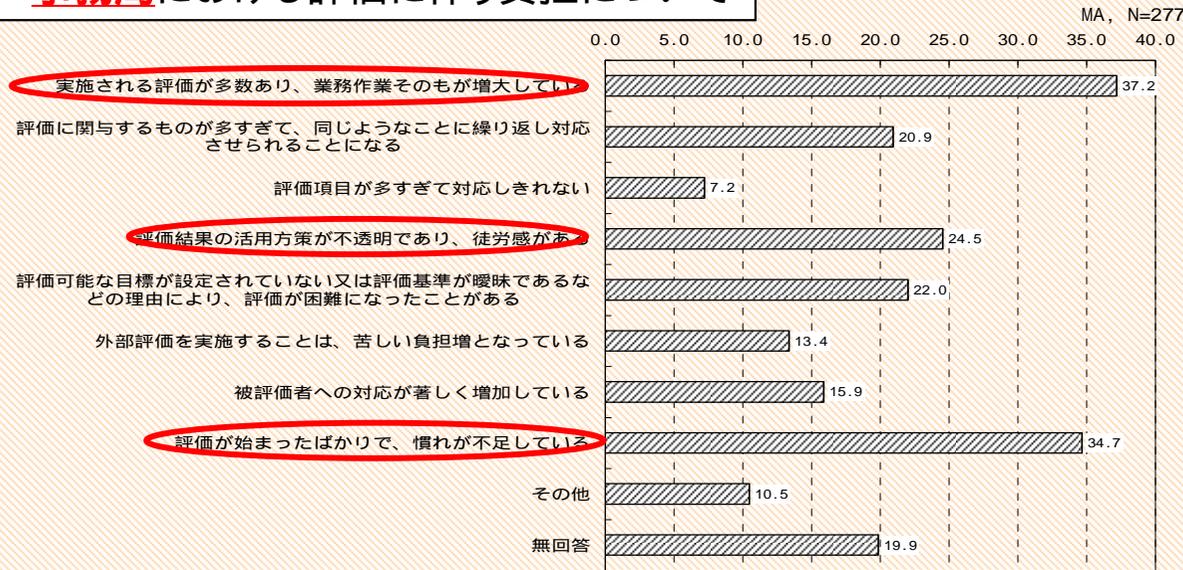
(回答数)

第16回研究評価部会資料「研究開発評価アンケート集計結果」より

「評価疲れ」について ～ 評価を行う側から～

評価の作業量が膨大、活用方策が不透明などから徒労感が発生、評価の不慣れにより負担が増大
評価の目的・対象等の明確化を徹底し、不必要なものは評価の合理化を行うべき

事務局における評価に伴う負担について

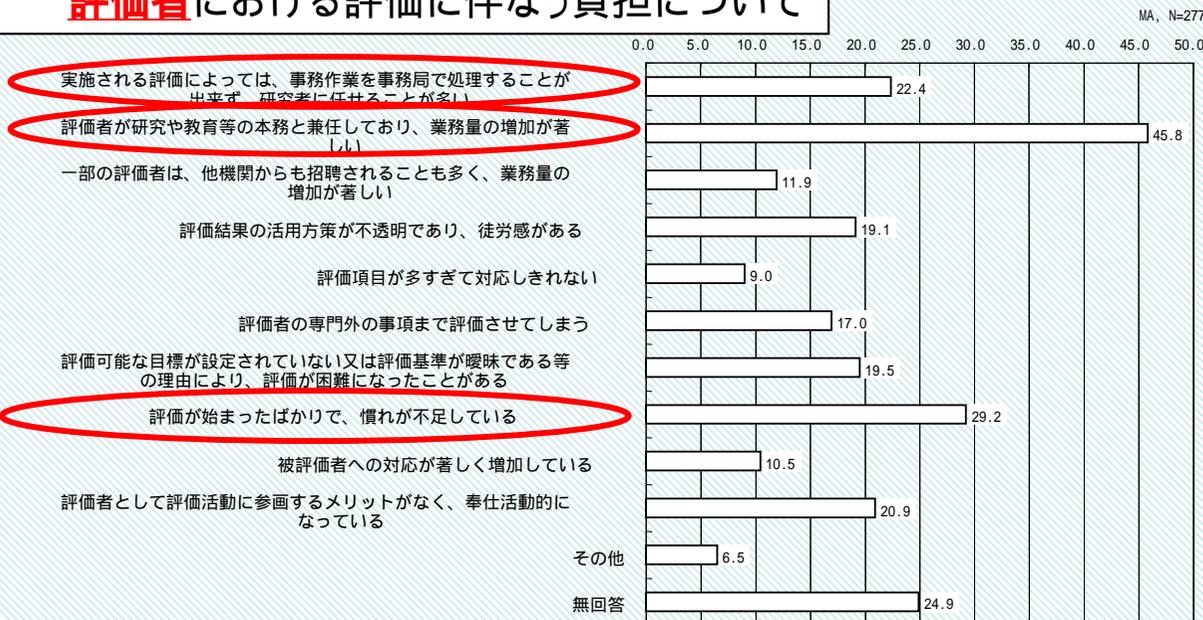


主な負担

実施される評価が多数あり、事務作業そのものが増大している
評価が始まったばかりで、慣れが不足している
評価結果の活用方策が不透明であり
(例：どこまで資源配分に直結するのかが不透明)、徒労感がある

第16回研究評価部会資料「研究開発評価アンケート集計結果」より

評価者における評価に伴う負担について



主な負担

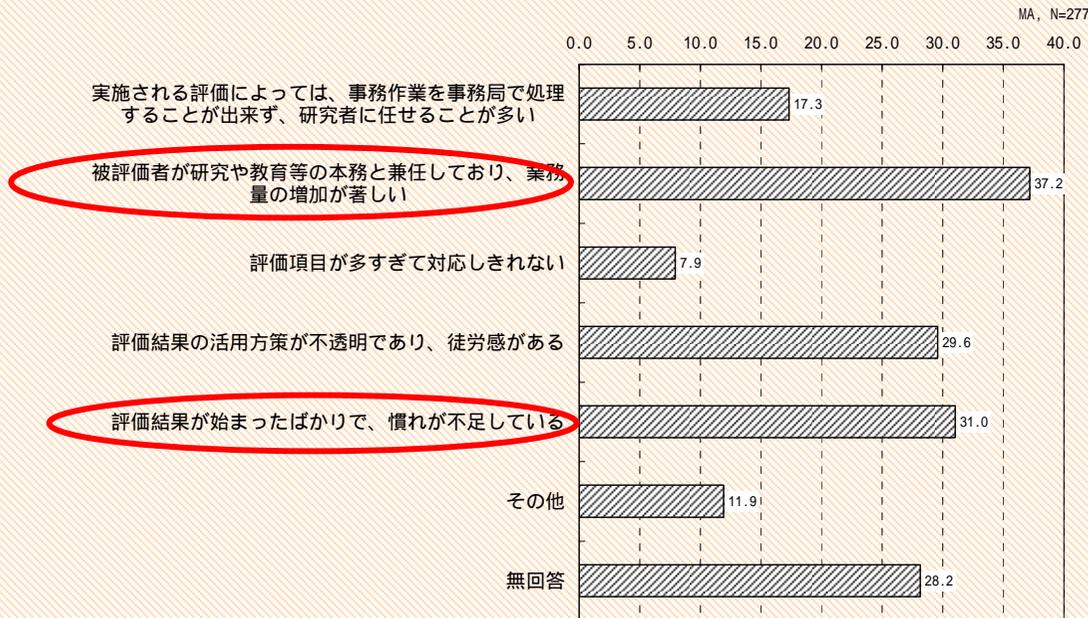
評価者が研究や教育等の本務と兼任しており、業務量の増加が著しい
評価が始まったばかりで、慣れが不足している
実施される評価によっては、事務作業を事務局で処理することが出来ず、研究者に任せることが多い

第16回研究評価部会資料「研究開発評価アンケート集計結果」より

「評価疲れ」について ～ 評価される側から～

「評価に関する業務量の増加」、「評価不慣れによる負担の増大の指摘
本業の教育や研究に支障をきたさないような支援が重要

被評価者における評価に伴う負担について



主な負担

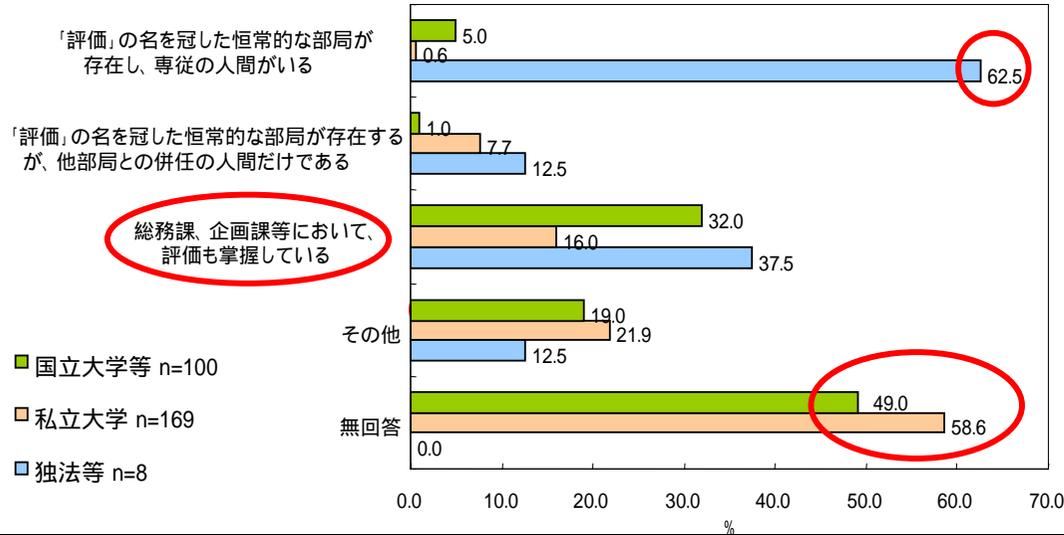
被評価者にとって、研究や教育等と併せ、業務量の増加が著しい
評価が始まったばかりで、評価に多大な時間を要する 等

第16回研究評価部会資料「研究開発評価アンケート集計結果」より

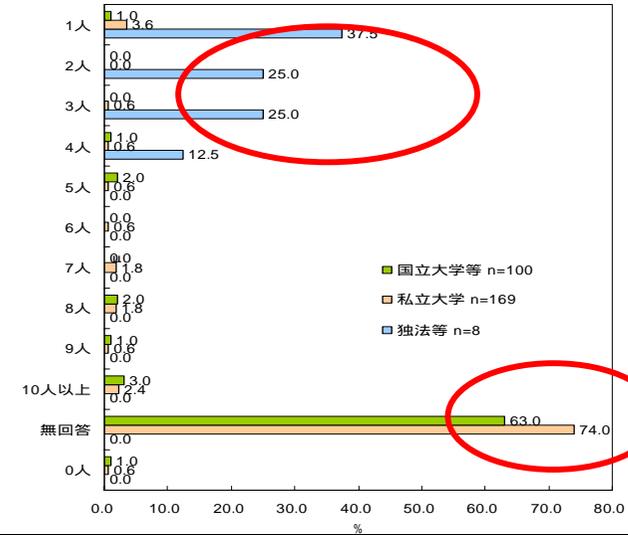
研究開発評価体制の問題点について～大学、研究機関の事務局について～

研究開発評価担当部局があいまい。
 評価担当部局がある研究機関においても評価体制が脆弱
 専門的知識を有する研究評価専任者は少ない

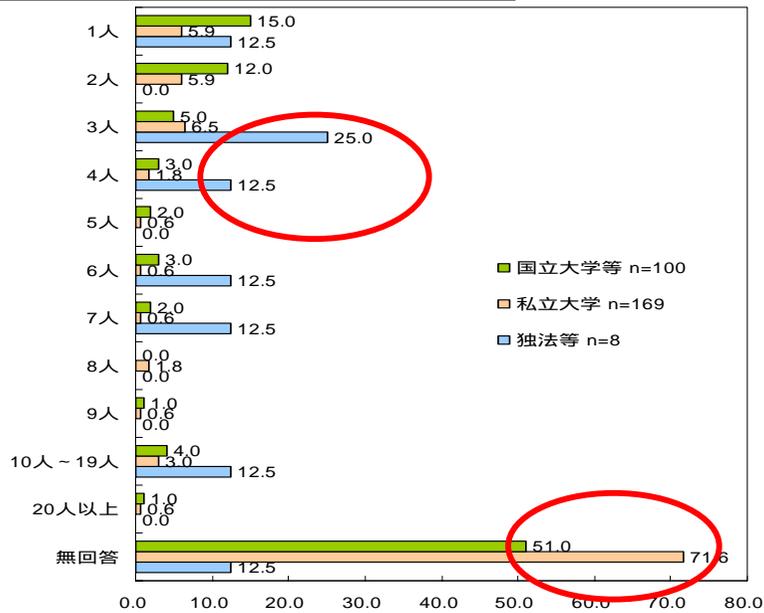
組織内における評価事務局の位置付け



評価事務局で評価業務に従事する職員のうち、研究経験者



評価事務局で評価業務に従事する職員数



評価事務局で評価業務に従事する職員のうち、研究評価手法に通じた者

